

# 現 存

岡  
本  
俊  
弥



ぼくたちは公園で会話をする。

いつとは決めていないし、晴れの日も雨の日もある。でも、不思議なことに、集まるメンバーが欠けたことはない。

公園の中央には、大きなオブジェが据えられていて、基台部分がちょうどベンチのような形なのだ。オブジェはパイプやバルブを組み合わせた抽象的な形だった。

いつ頃からあるのか、ぼくらが子どもの頃には既にあつた。コンクリートの土台こそ表面が荒れ色が抜けていたが、傷だらけでもステンレス製の金属パイプは、まだ光沢を残していた。

早く着いて誰もいない日は、座り込んで空を見上げる。

真っ青に晴れた日は何も見えない。空の深みに、果てしなく落ちていくようだ。

「やあ、クニカ」

顔を向けると、クレハが立っていて、こうつぶやく。

「あいかわらず、無防備なかつこうだな」

「ここにいるときは気が抜ける」

「どこでもだろ」

「そんなことはない。ここだけさ」

ため息をついて、ぼくの横に座り込む。埃っぽい匂いがした。

いつもそうだ。クレハの住む町の道路は、舗装がなかったり荒れていたりするのだ。

「粉塵が舞っている。いやになるけど、ここに来なければ気がつかない。人間はどんな状況でも慣れるんだ。そうでなきゃ、生きてられない」

こんな話をした。

\*

「そいつは毎晩、時間を決めず、不定期に打ち込まれてくる」

音はほとんどしない。

近くでなら、ばたばたばたとか、しゅしゅしゅとか、風切り音がするらしい。音が聞こえたときはもう危ない。逃げるにも手遅れだ。

機体は真っ黒に塗られている。

ばらばらになった残骸を見る限り、記号や番号や、何らかの印は一切ない。速度は遅い。大型の鳥ぐらいだと言われている。クレハは実際に飛んでくる姿を、じっくり見ることがないし、見たいとも思わない。

羽で飛ぶ。

ジェットでもロケットでもない。プロペラすらなくて、広い翼を羽ばたかせて飛ぶ。翼や胴体は、薄い樹脂を重ね合わせて作られている。本体自体はとても軽い。体内の半分は燃料電池、残り半分には爆発物が隙間なく詰め込まれている。

三階建てビルくらいの、超低空から侵入してくる。

落ちると、大爆発を起こす。家を揺さぶる鈍い衝撃が伝わってくる。街中のどこかがやられるのだ。

ただ、ごく近所でもない限り、クレハは無闇に外へ飛び出たりはしない。

野次馬が集まった頃に、第二撃がくる。

好奇心任せにするには、夜の町は危険だった。毎回群衆の犠牲者が出る。分かっている行動を抑えられない。馬鹿だと決めつけるのは簡単だが、見に行こうとする気持ちは分かる。恐ろしさと、破壊の凶暴さを確かめたい衝動のせめぎ合いだ。

恐怖と高揚、そんな原始的な感情を抑えつけるのは難しい。

夜が明け、一瞬の間だけ静かになる。

「町は荒れ果ててるけど、働かなきゃ稼ぎにならない。毎日離れた町まで窓の割れたバスか、周旋屋の無蓋トラックに詰め込まれて働きに出る。日雇いなら、何やかやの半端仕事があるから」

クレハには小さな妹がいる。両親と他の兄弟はもういない。妹を食わせて、自分も暮らしを立てなければいけない。

「どうして」

どんな爆発だったのか、と口にしそうになる。

「運が悪かったのさ。それだけだ」

しかし、クレハは一言で黙り込む。肉親や兄弟を爆発で亡くしたとは言わない。名目だけとはいえ、地域には休戦協定が結ばれている。

しかし、朝が過ぎ昼間となると油断できない。またランダムにあいつが飛んできるところになる。昼間くるものは空の色に塗られている。空中の埃に溶け込むようなくすんだ青い色に。

「労働現場によって危なさは変わる。屋外の広いところなら比較的安全だ。しかし音の聞こえない屋内となると逃げ場はない。運次第になる」

機械を扱うような仕事には熟練工が当たる。クレハたちは、人力でできる仕事を与えられる。

作業の途中でも、仕事は日没の前には必ず終わる。照明が狙われるからだ。陽が落ちた途端に、危険度は上がる。夜の町にはほとんど灯りはない。

「雨の日はいい。飛んでくる頻度が落ちる。戦果がよく見えないからとかいうけど、理由はよく分からない」

そんな日はちよつと安心して働ける。ずぶ濡れになりながらだが。

「明日のことは考えない」

慣れたつもりでも、クレハの眠りは常に浅い。何もないときに急に目が覚めることもある。目覚めたとき、見知った町がもう存在しないのではないかという不安がよぎる。実際、町のどこかは失われ、誰かが死んでいる。

だが、ある日、繰り返しの日常が乱れる。

暑い日だった。

炎天下で瓦礫の片付け作業をしていると、急に陽が翳る。晴天の日で、ついさつきまでは雲も見えなかった。

見上げると、たなびく煙のようなものが日差しを遮っていた。少し間を置いて、ごうごうと風が鳴る音が聞こえる。何が起こっているのか理解できないまま、作業者たちは呆然と空を見ていた。

煙はゆつくりと接近してくる。煙ではない、鳥か何かが集まって群れを作っている。いや、生き物ではない。

そう分かった瞬間、クレハは逃げ場を探す。見たこともないほど多数の、死の鳥たちだった。単独ではない、数え切れないほどの群れだ。人々も事情を悟って、パニックとなる。

もう一つ一つの機影が見える。

奇妙なことに、機体は見たことのない彩色がされている。鮮やかな紅、黄、緑、青や紫、そういう色が一齐に散開する。

空に無数の花が開いたように見えた。クレハは本物の花畑を知らないが、遠い異国の写真にそんな風景があったことを思い出す。

大きく円を描くように空全体に広がる。

花火だ。きらきらとさまざまな色をまき散らす。

だが、花は機首を下げ、高度を落とすと次々に爆発する。

狙いはなく、あらゆる建物、街路に無差別に落下する。

街は花に包まれながら、業火に焼き尽くされていく。普段なら警戒する時間帯ではない。街にあふれる男女が、老人や子どもが死ぬ。建物が崩壊し、道路を走る車が炎上する。土砂と、火災による黒煙が視界を覆い尽くす。

「よく生き残れたな」

「運がよかった」

「そのあと、何か変わったのか」

「何も変わらない。たくさん死んだが、何の意味もない死だ。でも、やってくしかない」

クレハは寝不足の目を腫らしながらつぶやく。

「他にしようがあるか」

ぼくは黙って空を見上げる。

「もうきてたのか」

クサトが立っていた。

いつ見ても、オーダースーツを着ている。ぼくの服のような、ほころびて薄っぺら

な生地じゃない。腕時計は毎回替えるのか、奇抜なデザインのベゼルを手首から覗かせている。

「貧乏くさい顔だな」

もう慣れたが、遠慮のない口調だ。

「そりゃ、ぼくらとクサトとは違うさ」

すると、少し殊勝なことを言う。

「生まれた世界が違うだけさ。自分の努力じゃない」

こんな話をした。

\*

クサトの住む町は眠ることがない。都心に向かう交通網は二十四時間稼働し、常に満員で時刻を問わず乗客がいる。人々にはそれぞれ目的があり、交代制の仕事や、合間の買い物に忙しいのだ。クサトの場合、早朝に部屋を出ると、帰ってくるのはたい

てい夜半を大きく過ぎてからだった。

「何をしてるの」

「ぼくはデータのバイヤーだけど、買うといっても待っているわけにはいかない。無理やりでも買わないとノルマが達成できない」

「買うって、誰から」

「誰でもさ、誰だってデータを持つてるだろ」

「通行人を呼び止めて商談するのだ。たいていは片手をふって追い払われる。みんな早足で歩いている。何の用かは知らないが、ともかく忙しいのだ。」

「データって何のこと」

「何でもだ。通話履歴、フォト、ムービー、銀行の出納記録、ネットのアクセス履歴、個人の住所録も買う」

「そんなもの売るやついるの。プライバシーそのものじゃないか」

「少しでも足を緩めた通行人には、すばやく料金表を見せる。結構な価格が付けられているという。貧乏人のいない町だが、金はいくらあっても邪魔にはならない。思わ

ず足を止めさせたら、もうこちらの勝ちだ。

「金額しだいだろ。個人を特定できる部分は使わないと言ってるし、そこらの一般人を特定したって意味はない。売る方も気にしない」

「クサトを雇ってるのは誰なんだ」

「ぼくはフリーランスだ。雇われじゃない」

クサトはいろんな情報リサーチ会社と契約している。雇用ではなく受託だ。手に入れたデータは、会社がいったん加工して、元請け会社に納品するらしい。その先はよく分からない。最後は、通信会社とか広告代理店とか、あるいはどこかの政府機関が買うのだろう。

「でもデータを取るのに、いちいち人を使うのか」

「ネットは規制が多いからな。法が変わって、クリックだけで簡単には入手できなくなった。その点对面販売の個人契約なら、合意さえできれば洗いざらい持って行ける」

「あくどいな」

「ビジネスじゃないか。契約してるのは大手の系列だから、結構高値を提示してる。」

あくまでも良心的なんだ」

「へえ、だとしても楽そうな商売だな」

「馬鹿いうな。朝から深夜までキャッチセールスして、やっとノルマぎりぎりだ。ごねる客もいるし、ねちねち値上げ交渉するやつもいる。時間ばかり取られる」

「そうなのか、儲かってそうに見えるけど」

クサトは目がくらむほどの歩合給をもらっている。

比べたことがあるが、住んでいる町の物価も高い。家賃も食費も、あらゆるものが高額だった。しかも、商品は日々値上げされる。データは商売の裏付けになるから、いくらでも売れる。比例して歩合も増える。インフレの世界では、お金の値打ちはない。給与は一円も残さず、できるだけ早く、モノに換えるのがトレンドなのだ。

「考える暇がないだけでね。欲しいと感じたら即決で買うんだ。ため込むのは愚かだ。ちよつとは贅沢もしないとな」

「うらやましい。ぼくらの仕事は食うだけでやっただ」

「余所のことは分からないけどな」

まんざらでもない笑顔を見せた。

ただ、クサトは睡眠不足なのか、会話の途中でよく居眠りをする。いつ見ても疲れが抜けず、顔色は悪い。

ノルマは絶対で、果たせなければペナルティがある。

食いはぐれるわけではないが、条件の良い仕事は減る。いまの生活水準は落とせない。できるだけ派手に、豪勢に生き続けたい。一度落ちれば、明日が見えなくなる。深夜までキャッチを続けるのは、不安を紛らせるためでもある。

その一方で、狂騒感もある。誰もが感じている、踊り出したくなる気分だ。浮かれ騒いで、世の中の急流に身を任せたいとも思う。

どちらにしても、先は見えない。

だが、あるとき幸運に巡り合わせる。

いつものように、話を持ちかけている合間に、一人の女が近づいてくる。

「買い上げてほしいものがある」

「え、ありがとうございます」

クサトは一瞬戸惑う。お客から呼びかけてくることは滅多にない。売り手市場なのだ。女は料金表を確かめもせず、端末の画面を見せる。

「一覧だけど、これで分かるかな」

小さな文字で表示されたサムネイルだった。一つ一つのファイルサイズが大きかった。数も異様に多い。

「……どこのデータですか」

「それは見てもらったら分かる。ここでは言えないけどね」

「違法なデータじゃないでしょうね」

「それも答えられない」

「何も分からないままでは、ちょっと」

すると、女は一つのファイルをタップする。中身はテキストのようだった。画面をゆっくりと英数字の羅列が流れていく。個人名と何らかのIDや、暗号キーらしき数字、そのあとは何とでも取れる怪しげな数字が並んでいた。画像かもしれない。

「何人分あるのですか」

「全部で十万人分はある。これ以外にも、まだあるよ」

女が提示してきた指し値は半端ではなかった。違法でないわけがなかったが、そういうデータの買い手があることは知っていた。

リスクはあるものの、もし高額で転売できれば、日銭商売から抜けられるかもしれない。

「何のデータだったんだ」

ぼくは訊いた。

「政府系とか、防衛産業に属する社員の個人情報だ」

「で、売れたのか」

「ああ、まあ買い手は見つかった」

「よかったじゃないか」

「いや……」

クサトは苦い顔をする。

「データは確かに売れたが、そのデータには仕掛けがあった。画像に埋め込まれたト

レーザーだ。おとりデータなんだよ」

「公安関係か」

「利用されたのさ。データを開いた段階で、開封者のPCなり端末なりのIDが盗まれる。そこから先は知らないが、碌なことはないだろう。泳がされるのか、即捕まるのか、いやな噂しか聞こえてこない。ハッカーをハッキングするんだから、たちが悪いね。ぼくは警察の手先と見なされるようになった。面が割れてるから、商売はひどく難しくなった」

クサトは腕組みをする。ただ、それでも絶望する様子ではなかった。

「だがな、まだ景気はいいし、買い手は途切れていない。いまなんとかなるのなら、それでいいんだ」

悪びれずに言った。

「おう」

最後の仲間、クトニが姿を見せる。

服装でいうと、クトニだけ極端にみすばらしい。クレハのように汚れてはいない。

洗われて清潔だが、布地がくたびれていて、色はくすみ縫製が雑なのだ。買ったものではなく、手縫いだった。何度も繕った痕がある。

こんな話をした。

\*

クトニは農民だ。集落で数十家族単位のグループが生まれ、畑を耕し亜麻や大麻、穀物を植える。夜明けとともに野良に出て、日没に帰ってくる。食事は夜明け前と帰宅後の二回だけだ。上納する作物とは別に雑穀を植え、その収穫を煮たもの。朝も夕もさほど中身に変化はない。生きてはいけても十分な量とはいえず、いつも腹を空かせていた。原始的な農作業は、きつい姿勢を強いる重労働だ。食事を終えると、板間に雑魚寝して夢も見ない眠りにつく。

村には麻の繊維から糸を紡ぐ工房や、布を織る織機が置かれた工房もある。そこは夜も灯を点して作業が続いているようだった。力仕事ではないが、ノルマは畑仕事よ

り過酷だという。クトニの着ている服は、粗い大麻の糸で編まれたものだ。亜麻から作られる柔らかい布は、すべて神都に上納される。

クトニは神職の所有物だった。

いくつかの村落を束ねる地域ごとに、大きな社殿を持つ神社がある。そこには何人かの神職や下男が住んでいて、たまに村を巡察する。上納品は社殿に隣接した倉に収められる。どれぐらいの量が収められているか、働きは量の多寡で決められる。

秋の終わりになると、倉の穀物は麻袋に詰められ神都に送られる。その運搬を担うのも農民たちだ。人が荷車を引いて、荒れた道を何日も何日もかけて運ぶのだ。神都は高い山上にある。崖下に刻まれた、すれ違いもできない狭い道を上っていく。

すると、山頂に神都が現れる。

神都は山腹に築かれた一つの巨大な神社で、石組みの城壁が見上げるばかりに聳え立っている。城門には神兵が立哨する。見たこともない長い槍を持ち、兜を被り、微動だにしない。山上は風が強い。七色の吹き流しが場内に巡らせた紐につながれて舞う。至るところに、装束をまとった宮司たちが歩いていった。ここは神職の町なのだ。

幾層にも連なる神殿、大神宮の奥殿には大祭主が住んでいるという。

大祭主は神の子孫であり、もちろんクトニが目にすることはない。同行する神職たちでさえ、お目通りできる機会はないと聞く。倉庫に捧げ物を積むと、荷車の行き交う町を見物する暇もなく、クトニたちは元来た道を引き返す。

「ここらへんは、かみさまのおわしますところやけ、おまえらのおるところなどありやせんと、ぬかしよる」

「ひどいな」

「わしらは、くわしてもうとる、ぶんざいやからな」

「それにしても、荷駄の馬の代わり、家畜と同じとはひどい」

「ここにはあつても、わしらにはないものやな。わしらのさとは、わしらしかおらん」

クトニの住む世界では、使役に使われる動物はいない。動物は神の変移の一形態であるので、殺しても閉じ込めてもいけない、とされる。あらゆるものは神なのだ。そもそも、代わりとなるクトニたちがいるのだから、必要もないのだ。

だが、日常は突然終わりを告げる。

ある日、見たことのない生き物に乗った兵士の群れが現れた。動物を使うという時点で、彼らは神の信徒ではなかった。

兵たちは村に現れると、大きな声で口々に叫んだ。意味はまったく分からなかった。見上げるだけで、動こうとしない村民に苛立ったのか、剣を抜き、なぎ払うように振り回す。人々は慌てて逃げ惑う。

そのまま兵たちは神社に向かった。

恐ろしいことに、神社には火が放たれた。燃えさかる建物の前で、神職は剣で打ち倒され、首を刎ねられた。

村には新しい統治者が来た。統治者の侍者の一人は、クトニにも分かる言葉を話した。

「おまえたちは、もはや、かみのどれいではない。あらたなおうにちゅうせいをつくせば、もつとよいくらしができる」

だが、暮らしは特に変わりがなかった。同じ時間に起き、畑に出てこれまでと同じ

作業をするだけだ。しかし、秋になる前に、彼らは神都へ向かうよう指令が出た。奉納品を運ぶのではない。武器を積んだ荷車を引くのだった。いつもより重い荷物だった。村々を経るごとに、荷車の隊列は増え、道路一杯を占めるほどになった。

神都は包囲されていた。

動物に乗った兵士だけではなく、クトニたちと同じ民もまた武器を携えて、最前列に立たされた。持ったこともない槍で、神に刃向かえるのか。高い城壁の神殿を攻め滅ぼすことなど、できはしないのではないか。

仲間たちは、城壁から射られる矢や石に打たれ、次々と死んでいった。異邦の兵士たちは雑兵の死など一顧だにせず、弓に似た巨大な兵器で攻撃を仕掛けた。一抱えもある大石に藁が巻き付けられ、火をつけてから、引き絞られた矢のように放つのだ。そのたびに、神の都では火災の炎が上がった。

やがて、神殿は陥落した。

命乞いをする神都の神職たちは、一人も許されなかった。神都に籠城した高貴な男も女も、子どもすら斟酌はなかった。容赦なく皆殺しにされる。首が山のように積み

上げられ、異臭はいつまでも漂った。高山の上では水は貴重で、血糊を洗うこともできな。いつしか乾ききり、埃にまみれていった。

大祭主は首をつられ、天主の軒先でさらし者になった。鳥が目玉をついばんでいた。クトニたちは恐ろしげに、見守るだけだった。神は死んだのだ。

「それで、どうなった」

「かわりやせん。むらにもどされ、また、はたけしごとやな」

「新しい兵隊はどうしてる」

「あたらしいやかたができて、そこにすんでおるさ。なにも、かわりやせん」

「奉納品はいまでも納めるのか」

神都は今でもある。

険しい道を運ぶのは今でもクトニたちで、神社が焼け落ちた後、見知らぬ様式の伽藍が土台をそのままにして築かれている。

「そうじゃ。いまでも、いままでも。あすのことなどわからんが、おそらくかわりやせん」

だれもが「いま」を生きている。いまだけ、を生きているのかもしれない。昨日は記憶の中、明日は予想でしかないからだ。ただえんえんと続くいまを生きている。

ぼくら四人は、どういう関係なのだろう。

住んでいる町はもちろん、住んでいる社会も違う。ただ、同じ「いま」を生きている点では仲間だといえる。抽象的な意味ではない。過去でも未来でもなく、生きている瞬間の現在、ぼくたちの生きる「現存」に接点があるから、同じ「いま」だといえる。

宇宙は混沌からできている。いや、ぼくには証明できないが、そういう考え方があ  
る。混沌、カオスの世界では初期条件の小さな違いで、全く違う世界が生まれる。し  
かし、違う世界には個別の「いま」が存在するだろう。

独自に進化したA B C D四つの世界があったとき、同時の「いま」とは何か。

絶対的な時間がない以上、その世界は独自の時間を刻んでいるはずだ。

クレハ、クサト、クトニ、そしてぼくは、少なくともそれぞれの「いま」を生きて

いる。

しかし、この公園が、四つの世界の接点になっている。違っているかもしれないそれぞれの「いま」が、接点であるこのときに結ばれているのだ。

この一点を過ぎた先には、また別の「いま」がある。  
最後にぼく、クニカの物語を書こう。

\*

ぼくの国では、毎年人口の一パーセントちよつとの人が亡くなっている。

一億二千万人に対して一四〇万人、毎日三八〇〇人くらいだろうか。人の寿命は平均八五歳、高齢者が多いことを考えればおかしな数字ではない。死者は、思いのほか多いのだ。

だが、疫病が蔓延してから死者は増えた。疾病といっても、重症化すると肺炎となる風邪だ。単なる風邪なのだ。

この風邪は毎年変異する。老人が罹る病だったのは初期の頃で、いまでは年齢を問わず重症化する。変異の予想がつかない。去年の免疫は今年には持ち越せないのだ。変移に追従する有効なワクチンや免疫は存在せず、死亡率はコンマ五パーセントで推移する。罹患者は風邪並み、異常なほど高くない。そう、一年間の罹患者四千万人に対し、コンマ五パーセントなら、死者はおよそ二〇万人になる。

多すぎるだろうか。

インフルエンザと同じで、直るまで外出できない。初期の病状を緩和する以外、治療薬がないのも同じだ。自己治療できる者だけが生き残れる。

ぼくらは毎年百万単位で人が死ぬ国にいる。二割弱死者が増えても、変化量だけを見るなら、たいした数じゃないと思う。ランダムに人が死ぬ、クレハの世界と同じだ。

そうじゃないか。

重傷者の発生が平準化してから、病は日常になった。交通網は昼夜を問わず運転される。クサトの世界のように、昼と夜の二交代制が定着した。定員は半分になり料金は倍だけれど、経済は様相を変えても、ともかく動いている。人々はマスクを着け、

接触を避けて通勤する。触れることで感染する病なのだが、自宅を職場にできるのは相変わらず一部の人のだけだ。

とはいえ、ぼくらは慣れてきたし生き残れた。これからも生きていくだろう。クトニたちと似て、変わらない「いま」を送っていくのだ。